

現代社会とフーコー研究について

石川 寛 *

I. 抵抗のポストモダニズム

モダニズム建築の素材は、基本的に、鉄、コンクリート、ガラスである。それら3つの素材を用いた、できうる限り無駄を排除したデザイン。ミース・ファン・デル・ローエやル・コルビュジェなどはそういった建築のデザイナーの代表として必ず引き合いに出される。

ミースは、1922年5月の大ベルリン芸術展において、一つの高層建築のプロジェクトを展示した。⁽¹⁾ それはガラスの摩天楼と呼ばれたことからわかるように、表面がガラスで覆われた30階建ての高層ビルである。無駄のないデザインの、天に向かって屹立するシンプルなタワーであった。

ミースによる展示から50年後、ニューヨークという地において、別の建築家によってモダニズムの原理によって貫かれた超高層ビルが設計され「現実」のものとなった。ミノル・ヤマサキ設計の世界貿易センターがそれである。

ジャン・ボードリヤールはかつて、このモダニズム建築について、ある点に着目して述べていた。⁽²⁾ 「世界貿易センターの二つのタワーは、正方形の土台の上に立つ高さ400メートルの完全な平行六面体で、完璧にバランスのとれた、窓のない通底器となっている」。まさにモダニズム建築と呼ぶ以外にないようなこの二つのタワーは、ニューヨークに存在するビル群において比類なき高さを誇っていた。この比類なき高さゆえに、「人種が違ってもいうように、他のビルの群れを無視しており、他のビルと自分を比較したり競争したりすることはもはやない」。

しかしボードリヤールが着目した点とは、この比類なき高さではない。この高さの「二つのタワー」があるということ、「二つの全く同一の建築が向かいあって存在するという事実」である。

この二つのタワー以外のニューヨークの摩天楼は、さまざまな高さを持ち、それぞれのデザインをもって建てられている。それらは「競争的な形で向かいあって」建てられており、「ひとつひとつが恐慌と競争をつぎつぎに乗り越えてきたシステムのそれぞれの時期を表している」。経済的に他者としのぎを削り合い、相手を乗り越えようとしてきたことの象徴である。

それに対し、他の摩天楼とは隔絶した高さの二つのタワーを持つ世界貿易センターは、他者を乗り越えるとか競争しようとかというものとしてあるのでは、もはやない。現実と隔絶した次元にあって、二つが互いに反映するものとしてある。「この二つのタワーがお互いに指示しあっているのは、モデルという概念であって、それぞれのタワーがお互いに相手のモデルになっている。こうした双生児的性格のもつ価値はもはや相手を乗り越える価値ではない」。つまり、「一切の競争の終わり」を意味している。

そしてそれは「オリジナルなもの一切の準拠の終わり」を示す。「記号が純粋であるためには、それ自体の内部で二重化が行われる必要がある。(…) この記号の二重化が記号の指示するものの存在に真に終止符を打つのだ。」世界貿易センターのこの二つのタワーは、「二重化の眩暈の中」で「記号の指示するものの存在」というオリジナルなものに「真に終止符を」打った。こうして残ったものは「オリジナルなきコピー」である。そしてこれこそボードリヤールの言う「シミュラークル」の定義であり、シミュラークルの世界こそボードリヤール的な「ポストモダン」である。

つまり、ボードリヤールにとって、世界貿易センターの二つのタワーというモダニズム建築こそポストモダニズムの象徴なのだ。

ところで、「ポストモダン」という語が広く流通する原因の一端を担ったのは、ジャン＝フランソワ・リオタールであったことは言うまでもないだろう。『ポストモダンの条件』⁽³⁾で彼は、「大きな物語」から「小さな物語」への分散という形でポストモダンを条件づけたわけだが、ここにおいてポストモダンは一種の時代概念として使用されている。モダンの後としての、時代区分としてのポストモダンである。

ボードリヤールも、ポストモダンを時代概念として捉えている。しかし、ポストモダンは様式概念としても使用される「不純な」概念である。ほかならぬリオタールも『子どもたちに語るポストモダン』⁽⁴⁾において、ポストモダンを様式概念として捉えているかのような使い方をしている。リオタールは言う。「<ポストモダン>の<ポスト>は(…) <はじまりにおかれた忘却>をよく考えてつめてゆくプロセスを意味するものなのだ」。その成立の根拠を常に問い直す、常に出生状態にあるもの、様式概

念としてのポストモダンはこのように捉えられるだろう。

ポストモダニズムを二つの種類に分ける論者もいる。ハル・フォスターは、ポストモダニズムを「抵抗のポストモダニズム」と「反動のポストモダニズム」に分けている。⁽⁵⁾ 後者は「モダニズムを拒絶し現状を讃えるポストモダニズム」である。モダンを否定しその結果として「伝統」というプレモダンへと回帰するようなアンチモダンとなるようなポストモダニズム、それが「反動のポストモダニズム」である。反対に、そういった「現状に抵抗」し「起源に回帰するのではなく起源の批判となるような」ポストモダンが「抵抗のポストモダニズム」である。

「抵抗のポストモダニズム」が真に意味あるものとしてあるためには、ポストモダンが、時代概念と様式概念とが重なり合う「不純な」ポストモダンでなければならないだろう。そうすることで、われわれの近代という、まだ続いている（かもしれない）時代が、どのようなものなのか、分析し批判し抵抗するポストモダニズムたりうるだろう。

II. 三つの力線

「ポストモダン」という語と重なり合う領域が多く、ときにはほとんど同義のものとして使用される語に「現代思想」がある。

この「現代思想」という語があたかもひとつの知の領域を指しているかのような現状があるが、それは、西谷修によれば、「従来の学問ないし知の枠組みには収まりのつかない知の形態、あるいは振る舞い方が登場してきた」からである。⁽⁶⁾ 「現代思想」はこのような戸籍不詳の「不純な」ものである（「現代思想」と「ポストモダン」の類似性はここにもあらわれている。そしてここでの「現代思想」は「抵抗のポストモダニズム」と重なり合うものであることはいうまでもない）。

ところで「現代思想」（そしてポストモダン）といえばフーコーの名前が挙がらないことはまずないといってよいであろうが、それはフーコーが「従来の学問ないし知の枠組みに収まりのつかない」ものであると認識されてきたからであろう。そして、それだからこそ、フーコーを採り入れようとする者も多い。

日本においてフーコーの名前が輸入され始めた当初は、フランス文学（あるいは哲学）の領域において流通しはじめ、そして、その領域の研究者が紹介者となっていた。⁽⁷⁾

その後何度かフーコーが来日するたびに彼の地での名声が知れわたるようになり、彼の研究の価値がより広く認められるようになっていった。そして文学哲学以外の領

域にも浸透していくようになった。フーコーの死後は、彼への関心は低くなるどころか、さらに高まっていった。

そのような、日本における、フーコーの死後の関心の高まりを、渡辺守章が整理しているのだが、それは「3つの力線」に沿ったものである。⁽⁸⁾

渡辺による「3つの力線」とは…

1. 同性愛に対するフーコーの態度が知られてくるようになってきたことから派生する「新しい倫理」とでも呼ぶべき問題に関すること。
2. フーコーにおける権力論が、主体＝主観性の成立にどのように接続されていくかを論じたもの。
3. アングロ・サクソン系のフーコー研究、つまり、英訳からのフーコー理解に強く影響を受けたもの、それらは「フーコー権力論」に関心が集中している。

この整理は1993年の時点でなされたものであり、その後これら3つの力線はそれぞれ太くなったり分岐したり他と絡まり合ったりしながら、さまざまな分野にその交通網を広げている。

たとえば第1の力線に関して言えば、クィア理論やジェンダースタディーズの特集が組まれた雑誌から、フーコーの名前を見つけ出すことができないということがほとんどありえない、という状況となっているほどその力線は太くなっている。⁽⁹⁾そしてそれは他と触発し合ってさらに別の力線を生み出している。アーティスト集団ダムタイプの中核人物であった古橋悌二の発言は、晩年のフーコーの発言を、90年代という時代そしてパフォーマンスという空間、そういった自らの土壌において培養させたかのようなものであった。エイズと共に生き、35歳の若さで亡くなった古橋が、実際にどれだけフーコーを参照していたかは不明であるが、彼の遺稿集を読めば、彼の背後には確実にフーコーがいたということが感じられるだろう。⁽¹⁰⁾そして、古橋の死後もダムタイプは世界的に活躍している。それは古橋によって引かれた線が、また別の線となってさまざまに浸透しているということでもある。⁽¹¹⁾

第2の力線は渡辺によれば「フーコー死後のフーコー論に重要な方向づけをしたジル・ドゥルーズの『フーコー』に代表されるもの」である。身体と身体、身体内部、身体と精神などのさまざまな関係性と主体の成立の問題は、フーコーにおける「倫理」の問題や「自己」の問題とも直接つながり合う重要なものである。しかし現在、第1の力線に比べるとその力線は太くなっているとは言いがたい（このことに関しては後述する）。

しかし、第2の力線が、第1の力線と直接に関連してくるものであるクリア理論やジェンダースタディーズと、無縁であるはずがない。「サイボーグフェミニズム」のダナ・ハラウェイ⁽¹²⁾や『ジェンダートラブル』のジュディス・バトラー⁽¹³⁾や『揮発性の身体』のエリザベス・グロツツ⁽¹⁴⁾は、1990年前後くらいから活躍が顕著となったが、彼女達の研究はフーコーがいなければ存在し得なかったであろう。フーコーの影響をもろに受けつつそれを発展させていった彼女達の研究は、フーコー以外のフランスの哲学者もしっかり消化され（特にグロツツはドゥルーズから多くを継承している）、そうした上で独自の身体観をつくりあげていった。彼女達の研究は第2の力線に合流していくものではあるが、日本でも特にフェミニズムやジェンダースタディーズに対して強い力を与え続けている。そういった点ではむしろ、彼女達の研究の影響を第1と第2の力線の絡まり合いとみることもできるだろう。このように現在では第1の力線と第2の力線は絡まり合っても存在すると考えられよう。

英米系という、従来とは違った角度からのフーコー論の影響が強い第3の力線を構成したのは、政治学者、社会学者による研究である。それはどのような線であり、どのようなようになっていったのだろうか。

Ⅲ. アングロサクソン、権力論、社会科学

第3の力線を構成するのは、政治学者・社会学者による研究である。

渡辺は、91年から92年にかけて立て続けに英米系のフーコー研究書が邦訳出版されたことを特記している。そこに挙げられているのは5書であるが、そのうち3書（バリー・スマート『ミシェル・フーコー入門』、レマート/ギラン『ミシェル・フーコー 社会理論と侵犯の営み』、バーナウアー/ラズミュッセン『最後のフーコー』⁽¹⁵⁾）の企画・翻訳に携わっている政治学者がいる。山本哲士である。

山本はやくからフーコーに着目していた。フーコーの死後すぐに他の研究者と共に『ミシェル・フーコー—1926-1986 権力・知・歴史』⁽¹⁶⁾を出版しているし、同じ年に雑誌『現代思想』特集「フーコーは語る」において「《良き調教》としての教育権力」というテキストを発表している。⁽¹⁷⁾その後もフーコーに関する研究を続けて『フーコー権力論入門』⁽¹⁸⁾を1992年に発表している。これらのタイトルからもわかるように、山本の主眼は、フーコーの権力論（山本の言葉でいえば「パワー関係論」）にある。

山本は、前述の3書にラビノウ/ドレイファスのフーコー論⁽¹⁹⁾を加えた英米系のフーコー研究書4書について、次のように言明している。「この4書をもってすればフーコー

にたいする社会科学的な理論の読みはなされます」。⁽²⁰⁾ この言明から、山本によるフーコー読解の二つの特徴がうかがえる。

一つは、フーコーの「社会科学的な読み」において、ドゥルーズなどによるフランスにおける研究を参照する必要性を山本は感じていないということである。⁽²¹⁾ なぜか、ドゥルーズが社会科学と相容れないからなのか、それともドゥルーズがとるに足らないものだからなのか。山本は次のように言う。「フランス人はフーコー権力論をまったくといっていいほど理解できていません。ブランショやドゥルーズのフーコー論はその典型です」。⁽²²⁾ デリダについても「要するに饒舌」と表現し、フーコーとの間には「千里の隔たりがあるほど異質です」と述べ、⁽²³⁾ 「デリダやドゥルーズらの（三流）哲学には、決着がつけられよう」とも述べている。⁽²⁴⁾ 山本にとってドゥルーズやデリダは意味のないものであるらしい。

もう一つは、フーコーを、「社会科学」の中に、とり込もうとしていることである。山本は『フーコー権力論入門』において次のように言っている。「フランスの現代思想にたいする理解を、社会科学の地盤変化として理論的に見ていかねばならない」。⁽²⁵⁾

ここで「社会科学」という語によって山本があらわそうとしているもの、あるいは「社会科学」に山本が求めているものは何か。それは「全体性」であろう。「日本では、(…)社会科学理論はトータリテを重視する傾向があります。(…これを)クリティカルなベースにしつつ、社会的なものなかの全体性として理論化」という道筋を、フーコーの社会科学への取り込みのためにたてたい、と山本は述べている。⁽²⁶⁾

かつて、全体性としての社会科学にマルクス主義があった。特に山本の世代まではその呪縛が強かったであろう。そこから、マルクス主義への対決という意識も強く生まれる。そして、フーコーは山本にとってマルクス主義と対決するためのものであった。彼はフーコー権力論を「第一にマルクス主義/構造主義への思想的対峙として」強調したいと述べているし⁽²⁷⁾、フーコーを読むことで「マルクス主義とはまったく異質の地盤のうえに「政治的なもの」をニヒリズムにおちいらずにとらえられるようになった」とも述べている。⁽²⁸⁾

その対決は山本にとっては、マルクス主義を分散化させ断片化するのではなく、もう一つの全体性へと向かうことによってなされる（この方向性は、未だにマルクス主義に強く呪縛されていることの表われといえまいか）。だから山本はフーコーの権力論を権力に関する一般理論として捉えてようとしているし、フーコーのさまざまな仕事を「全体化」して一種のグランドセオリーを構築しようとしている。その結果、ここ

にあてはめれば「万能」といったような、全体性としての、一般理論へと、フーコーを向かわせようとする事となっている。

IV. 全体性と断片

山本のようにフーコーに全体性を求める政治学者もいれば、フーコーにそのようなものがないことを認め、それに対する批判を述べる政治学者もいる。

藤原保信は、フーコーの「理論の役割」が、「体系化した知識を提供することにあるのではなく、それぞれの領域においてひき起こされる抵抗のために、それに固有の理論を提供し、道具として機能していくことにある」⁽²⁹⁾と書いている。ここでは、フーコーの政治学における重要性を認識しつつも、政治理論に「一般的で規範的な理論」を求める藤原⁽³⁰⁾にとっての不満がうかがわれる。

このように要約された藤原によるフーコーの理論の役割は、その記述に誤りがあるわけではないが、その把握の仕方に修正の余地を残してはいないだろうか。

この文章は「特定領域の知識人」を藤原が記述している文脈に在るものである。だから「それぞれの領域」はそれぞれの「特定領域」である。「特定領域の知識人」は「それぞれの特定の専門的領域において」活動する知識人である。そして藤原は、「特定領域」を「普遍」と「区別」するものとして捉えている。「世界分化という近代の現象」に対応するものとして「特定領域」から発言するところの普遍から分化した知識人の登場、これが藤原の捉えたフーコーの「特定領域」の知識人である。⁽³¹⁾

ここからわかることは、藤原は特定領域というものを閉じたものとして考えているということである。しかし、それぞれの領域はそれぞれ独立してあるのではない。相互に関係しあっている。だからフーコーは次のように言う。特定領域にかかわる「非普遍的な」問題と「普遍的な」問題は「本当の意味で接近している（強調は引用者）」。⁽³²⁾それぞれの領域におけるそれに固有の理論は、そのほかの領域にも影響を及ぼしていく。⁽³³⁾

藤原は「権力が多元的に分散し、抵抗が局地化せざるをえないがゆえに、それにたいする知識人の係わり合いも特殊的、専門的であらざるをえない」⁽³⁴⁾と書くが、「権力が多元的に分散している」ということはさまざまなものの関係が多元的にあるということであり、「抵抗が局地化」するのではなく、抵抗が局地からはじまり他のさまざまな部分に影響を及ぼしていくのである。

だから「道具として機能する」ということも、単にその領域のみで使用されるとい

うことを意味するのではない。有用な道具が或る領域で機能すれば、それは他の領域にも影響を及ぼし、そして、さまざまなものが変化していく。たとえばテレビという日常生活における道具は人々の日常の過ごし方のみならず、映画産業を根本的に変え、政治のあり方も変えた。映画の現場において、とてつもなく美しい映像を撮れるカメラが出現すれば、それは監督の演出方針を変え、編集方法も変わり、その作品を見た観客にも従来とは全く違う何らかの感情を生み出すだろう。その観客は翌日、新鮮な気分で仕事に臨めるかもしれない。

われわれは関係においてある。さまざまに関係しあい、それらは常に動き、相互に影響しあい、重層的に絡まりあう。一つの出来事が思わぬ別の出来事を生む。予想もしなかったことが、そこからまた引き起こされる。全く自らの預かり知らぬところでその影響が出ることもある。まさに「リゾーム」である。われわれはドゥルーズから多くを学ぶべきだろう。

そのような現実においては「特定領域の知識人」しかありえないだろう。「普遍的知識人」が何かを「提案」しても、それは現実とのズレを生むのみであり、抑圧につながっていくだろう。

だからフーコーによる権力分析も、具体的な、特定の、ある状況における権力についての分析である。こういったプロジェクトであり、そのような「断片」である。この「断片」は、公表され出版され人目に触れ、関心を引き起こせば、その時点で諸状況は変化している。現在のアカデミズムにおけるフーコーの影響を見れば、変化は明らかではないか。

この「断片」が「よい」変化を結果的に生み出すかどうかは、もちろんわからない。藤原はこの点で、「部分的抵抗が、真の解放や改善につながっているという保証はどこにあるであろうか」とフーコーに疑問符をつける。その重要性は認めながらも「一般的で概念的な理論」という全体性をもたないがために「保証」のないフーコーの、政治理論への導入は慎重である。

V. アングロサクソンからの問い

社会科学の取り込みはこのように断片と全体性のせめぎ合いである。

全体性の問題をとりあえず括弧に入れて、英米系の反応を整理しつつフーコーの政治学のフィールドでの展開を模索しているのが杉田敦である。

フーコーの権力論が「政治学の存立にかかわるような深刻な問題を提起している」

という認識のもと、フーコーがどのような政治学的な問題点を抱えているように英米系の政治学者から見られているかを、整理している。以下の4つの問題点がそれである。⁽³⁵⁾

1つ目は、「客体化」としての権力への抵抗の拠点を「主体」に求める理論とは、フーコーの理論は相容れない、という点。

2つ目は、フーコーは自らの批判の根拠を提示していないという点。「権力」に対して「抵抗」の必要性を説くのだが、なぜ「抵抗」しなければならないのか。そのとき何らかの規範を前提としなければ、「抵抗」しなければならないとは言えないはずだ。

3つ目は、フーコーが身を置いているのはどこなのか、という点。いかなる「知」も「権力」から派生する、というにもかかわらず、「権力/知」について批判的な言明が、フーコーにはなぜできるのか。「権力」から自由な特権的な場所にいるのか。

4つ目は、フーコーは「抵抗」の自然発生性をあまりに素朴に前提としている（と英米系研究者が捉えている）点。解放理論は、いつか外に出られるから革命せよ、と要説できる。それに対して、フーコーの主張は、決して外には出られないから抵抗し続けよ。これでは「抵抗」の契機は得られない。

以上が杉田による整理である。われわれはこれをどう考えるべきか。

第3点に関しては、フーコーはそのような「外」を想定していない、ということができはしまいか。フーコーはあくまで「中」にいる。もちろんフーコーだけではない。すべてにおいて「外」など存在しない。フーコーが権力を分析するのは、その「中」における「断片」である。たとえば規律社会に関して、ドゥルーズは、ミシェル・フーコーの理論を解釈しなおして3つの支配形態「君主制社会」「規律社会」「管理社会」を引き出したが、これら3つは常に重層的に共存しているものとして考えられるべきである。⁽³⁶⁾つまり規律社会とは、そのような層であり、つまり、「断片」である。その「断片」において、現にあるもの（知や主体）の、そのあり方から、それをつくり上げていっている権力、そのあり方を探っていく、というのがフーコーの権力分析である。

第2点と第4点是一个の問い、なぜ「抵抗」が生まれるのか、という問いにまとめることができよう。そしてこの問いは、藤原の「保証」への問いともつながる。規範という保証がないではないか、規範がなければ抵抗は生まれないのではないか、両者とも規範がフーコー批判の根拠である。

この問いは重要である。われわれはここでは次のように考えることを示唆するに留める。

なぜ批判するのか、なぜ抵抗するのか、なぜよい方向へ行くであろうと考えられるのか。それを考えるのに、規範によりかからなくても、「感性」があればいいのではないか。何を感じるのか、どのように感じるのか、権力を、力を。むしろ必要なのは「感性」である。⁽³⁷⁾そしてそのような「感性」は、現在をどう捉えるかという「現代性」と結び付いており、「倫理」と結び付いている。

必要なのは倫理である。フーコーは次のように言う。「最近の解放運動は、新しい倫理を構築するための原理を見つけ出すことに苦慮しています。必要なのは倫理であるのに、私とは、欲望とは、無意識とは何か、ということについて、いわゆる科学的認識を基礎にした倫理以外の倫理は見つけられていないままです」。⁽³⁸⁾

フーコー（そしてドゥルーズ）によれば、倫理は道徳とは区別される。⁽³⁹⁾ 規範は道徳的なものであり、そして、倫理とは違うものである。人間の行いを、超越的なもの（たとえば神）の価値に照らし合わせて生のありようを捉えるのが道徳である。それは個人を束縛へと向かわせるもろもろの規則の集積であり、規範である。一方、倫理とは「どこまでも内在的に生それ自体のありように即して、それをタイプとして捉えるタイポロジーの方法である」とドゥルーズは述べる。日々の生活における一つ一つの出来事によって定義し直されていく自らの生の様式、そのようなそれぞれに固有の生のタイプに基づいて自らの行いを律していくのが倫理である。

われわれの生に内在し、常に修正され、解体され、再形成されるような終わりなき運動、その中にあるのが倫理であるが、それは自らの内部で完結するのではない。われわれの生は他者（他なるもの）との関係においてあり、その運動も常に他者（他なるもの）との関わりにおいてある。だからこの生の様態は他者をどのように捉えるか、そして他者と共にあるこの現在をどのように捉えるかという「感性」と大きく関わってくる。

VI. 力線の現在

さて、渡辺が整理した第3の力線はその後どうなったか。英米系のフーコー解釈が中心となった権力論もいまだ存在するが、その他にもさまざまにこの力線は分岐している。「断片」化し、その断片がそれぞれ大きくなってきているといえるだろう。

ドゥルーズがかつて「空白」と表現した『性の歴史Ⅰ』から『性の歴史Ⅱ』を出版するまでの間、フーコーはコレージュ・ド・フランスで講義を続けていた。講義のテーマは、70年代後半は国家理性とポリスであり、80年代に入ると自己と他者と統

治に関することであった。⁽⁴⁰⁾ こういった講義の、特に 70 年代後半のテーマを「統治性」としてまとめた研究が進んでいる。⁽⁴¹⁾ この統治性研究は権力論の続編といえる。⁽⁴²⁾ これらの講義については、部分的にしか公表されていないという意味で未知の領域であり、そこにはダイヤがたくさん埋まっているに違いない。しかしこの「空白」はドゥルーズによれば、フーコーが「袋小路に入ってしまった」時期であった。そうであるならば、統治性研究のフーコーは、あくまで過渡期のフーコー、新たな思考の発展途上のフーコーであった。このことを忘れてはならないだろう。

フーコーが『性の歴史 I』で展開した「生—政治」、それは、あえて要約すれば、資本主義経済の発展に伴い、「私有化」されるものとしてではなく「社会化」されるものとして、人間の生命や身体が問題化されるようになってきた、このような政治である。脳死の問題や臓器移植の問題などに表われてきているような、人間の死が単なる機能不全として処理され人間の身体が公共の資材として扱われるような現在は、まさにフーコーの言う「生—政治」の状況である。現代的な問題としての「生—政治」は、市野川容孝などによって新たな生命を吹き込まれ、⁽⁴³⁾ 生命倫理の問題を考える際の一つの準拠枠を形成している。

規律社会、そして統治性に関するフーコーによる考察をネオリベラリズムに関する独自の分析と結びつけた酒井隆史『自由論』というものもある。⁽⁴⁴⁾ ここでの自由とは、ネオリベラリズムのことであり、「自由」の名の下に今何が行われているか」という問題意識における「自由」である。酒井はフーコーの「これからはセキュリティの時代になる」との言葉を引用し、「セキュリティ」批判をする。彼の言うセキュリティは、セキュリティの一側面でしかない。その一側面を執拗に論じ、そのセキュリティの標的とされる「アンダークラス」や「ならず者」へ感情的な重心を掛けている。しかし、「様々な不安がありうる状況の中で、あらためて社会の安全、個人の安全、国家の安全ということが問われている（強調は引用者）」と村上陽一郎も言うように、現在において、不安に対するセキュリティという側面を、セキュリティを論じる際には落としてはならないのではなかろうか。⁽⁴⁵⁾ フーコーは確かにセキュリティについて、酒井が見た側面から発言していたが、それはフーコーがその側面からしか見ていなかったということの意味するわけではない。「歴史の今、この時は何であるか」を初めて問うた哲学者、カントの教えを忘れたことが無かったであろうフーコー⁽⁴⁶⁾ は、常にそのときその時代とはどのようなものであるかを考え、その上で戦略的効果を狙った発言をしていたはずである。今ならばフーコーはどのように発言したであろうか。1976

年の時点で、ドゥルーズはフーコーに宛てた手紙の一節において次のように述べている。「自分を社会の除け者気取りの連中に対する、ミシエルの嫌悪を僕も共有する。狂気、犯罪、倒錯、麻薬といったものに対するロマンティシズムは、僕もだんだん耐え難くなっている」。⁽⁴⁷⁾「被害者の人権」に社会の目がやっと向けられるようになった現在、われわれはこの一節に記された考えを共有したい。

権力論を法理論に接合しようという試みもなされている。関良徳『フーコーの権力論と自由論』⁽⁴⁸⁾がその主たるものとして挙げられるが、彼の著作においては、他者の問題や自由の条件の問題なども採り込みながらフーコーの権力論が整理されている。

「わかりやすく」フーコーを解説しようとする流れもある。フーコーの全体像を、主に出版された書物の要訳をもってスケッチする、という方法がそれらの共通点として挙げられる。⁽⁴⁹⁾

以上挙げてきた中で、あまり触れられていない、あるいは扱われてはいるが消化不良気味なものに、晩年の倫理の問題、現代性の問題がある。第2の力線が第1の力線と比べるとその太さの進化が停滞気味であるのも、この領域が未だ薄いからである。フーコー自身が整理した彼の研究の第3の軸である自己の問題系の中心を形づくるこれらの領域は、前述のように、フーコーの権力論をどう捉えるか（規範の問題、感受性の問題）という点においても重要な位置を占めている。

この部分は特に、『性の歴史Ⅱ、Ⅲ』や晩年のインタビューや講演にあらわれている。しかしこの領域はフーコーにおいて突然出現したものではもちろんない。フーコーの重要著作を中心に、全体性としてではなく、断片を断片として、連続性と非連続性の相のもとに読んでいき、それを晩年のフーコーに繋げていくことによって明確な線がでてくるだろう。また幾度か触れたが、ドゥルーズの重要性を忘れてはいけぬ。にもかかわらず、特に政治学の領域においてはドゥルーズは軽んじられてきたといわざるをえない。ドゥルーズを採り入れることによってこの領域におけるフーコー研究が新たなものになっていくに違いない。

こうして研究されるものは、第1、第2の力線ともつながっていく。そして見えてくるのは「自由」の問題であろう。権力の問題を論じるフーコーから垣間見えていた「自由」が、ここで大きくその容貌をあらわすかもしれない。

VII. ニヒリズムの中で

「フーコーの思想、ドゥルーズの思想は、結局、相対主義的であり、価値を破壊し、ニヒリズムに行き着くことになる」。このように言われることも多いのは事実である。ここでニヒリズムについて少し触れておかねばならないだろう。

ハイデガーは『ニーチェ』において、ハイデガーによるニーチェ読解からのニヒリズムについて述べている。⁽⁵⁰⁾

このニヒリズムにはいくつもの層がある。

まず、ニヒリズムとは、「価値の喪失」である。「価値とは、大切なもの、肝腎なものとしてわれわれが評価するもののこと」。神、真理、理想、そのようなものの価値が、崩壊することである。

形而上学の歴史は価値定立の歴史である。真理を求める形而上学も、「力の意思」において、価値という「仮象的なもの」つくり上げているのだから、その意味では、真理自体もニヒル＝無なものである。超越的な真実や理想を掲げるキリスト教も、同じ意味でニヒルなものである。形而上学もキリスト教ももともとニヒリズムなのだ。

価値崩壊後に訪れる世界、これもニヒリズムである。価値の崩壊は、価値が仮象である以上、避けがたいことである。しかし、ここで、「力への意思」や「生成の世界(すなわちここでいま営まれている生とそれの変転する諸領域)」という「現実的なもの」が消滅するわけではない。そこで、価値をもう一度創造する方向へ向かう。もう一度といっても、価値が崩壊されつくした後ではその価値を「そのまま」復元するという方向へは向かないだろう。それは、他の力との結び付きや、新たな関係の創造へと、向かうことになるだろう。ニヒリズムとはこのような状況に人を対峙させる、むしろ、好機である。

世界貿易センターの二つのタワーが「まるで映画のように」崩壊した現実の出来事は、現実を忘れてシミュラクルの世界に「戯れる」ことの出来た時代に終止符を打つ出来事であったのではないか。そして、失われた二つのタワーを、そういった時代の形亡き墓標と考えることはできないだろうか。

われわれは、シミュラクルの世界ではないこの現実において、どのような力や関係の新しい結びつきがなされうるのか、考えていかねばならない。フーコーやドゥルーズといった、現実について考え抜いた哲学者について思い考えていくことは、その一助になりうることはなかろうか。

注

- (1) Honey (1986) 参照。 また、ミースによるガラスのスカイスクレイパー計画については 八東 (1998) 参照。
- (2) Boudrillard (1976) pp.96-109.
- (3) Lyotard (1979). 引用は p.119.
- (4) Lyotard (1986). pp.1-15.
- (5) フォスター (1987).
- (6) 西谷 (1995) p.4.
- (7) 「つまり、日本におけるフランス研究の最も先端的かつ最良の部分が、フーコーの言葉に耳を傾け、その《*interprete*》となったのだ。」 渡辺 (1993) p.20.
- (8) *ibid*, pp.29-31.
- (9) 「もちろん、フーコーの思想からゲイ運動が生まれたわけではありません。逆にゲイ運動という社会的実践がフーコーを変えたのです。そして、その変わったフーコーの思想がゲイ運動を変え、クィア・パースペクティブを生み出した。」 松田 (1999). pp157-167 に掲載されたデイビッド・ハルブリンの発言。
- (10) ダムタイプ・企画 (2000). ダムタイプのメンバーが企画した古橋悌二の遺稿、書簡、発言集である。
- (11) ダムタイプは現在も、高谷史郎を中心にして活動しているが、古橋が参加していた時代のダムタイプもビデオインスタレーション『LOVERS』やビデオに収録されたパフォーマンス『p/h』などで見ることができる。
- (12) Haraway (1986).
- (13) Butler (1990).
- (14) Grosz (1994).
- (15) スマート (1991).、レマート (1991).、バーナウアー (1990).
山本哲士は次のように述べている。「フーコー論のなかで、私の問題意識と合う（…これらの本を）翻訳する計画をたて実行しました」（山本 (1996). p.9)
- (16) 山本 (1984).
- (17) 山本 (1984) pp.130-141.
- (18) 山本 (1992).
- (19) Dreyfus (1983).
- (20) 山本 (1996) p.9.
- (21) しかし山本がフランス方面に全く無関心であるというわけではない。特にピエール・ブルデューやルイ・アルチュセールに関しては書物も著している。
- (22) 山本 (1992). p.15.
- (23) 山本 (1996). p.5.

- (24) 山本 (1996). p.308.
- (25) 山本 (1992). p.17.
- (26) 山本 (1996). pp.8-9.
- (27) 山本 (1992). p.243.
- (28) 山本 (1996). p.22.
- (29) 藤原 (1991). p.347.
- (30) 藤原は次のように述べている。「政治理論 (political theory) によって、わたくしは (…) 政治についての一般的でかつ規範的な理論そのものを意味している」。藤原 (1991). p.3.
- (31) 藤原 (1991). pp.347-348.
- (32) Foucault, DE III, p.363.
- (33) ドゥルーズは次のように言う。「理論とは全体へと波及するものではありません。自ら増殖し、ほかを増殖させるものなのです」 DE II, p.309.
- (34) 藤原 (1991). p.347.
- (35) 杉田 (1986).
- (36) Deleuze (1990).
- (37) キース・ガンダルは次のように述べている。「革新政治に必要なのは、世界がかくあるべしというヴィジョンではなく、耐え難いものに気付く感覚と、政治闘争の戦略として何が可能かを見定めるための歴史分析である、というのがフーコーの信念であった (強調は引用者)」 Gandal (1988) . pp.123-4
- (38) DE IV, p.386.
- (39) たとえば、Foucault, HS II の Conclusion や Deleuze (1981). の 2 章を参照。
- (40) フーコーのコレージュ・ド・フランスにおける 1977 年からの講義テーマは以下のとおり。「安全、領土、人口 (77-78)」「生政治の誕生 (81-82)」「生者達の統治について (79-80)」「主体性と真理 (80-81)」「主体の解釈学 (81-82)」「自己と他者の統治 (82-83)」 Foucault (2000). より。
- (41) たとえば 重田 (1997). や 柳内 (2000). など
- (42) フレデリック・グロによれば、「統治性」は晩年のフーコーの思考において「権力の概念」に取って代わる意味を持つものであった。Gros (1996). p.83.
- (43) 市野川 (2001). など
- (44) 酒井 (2000).
- (45) 村上 (1999).
- (46) DE IV, pp.562-578 および pp.679-688 参照
- (47) Deuleuze (1994).
- (48) 関 (2001).

- (49) たとえば、桜井(1996). や 桜井(2000). や 中山(1996). などがこれに含まれるだろう。
- (50) ハイデッガー(1997). pp.265-534. また、ハイデッガーによるニーチェ読解からのニヒリズム解釈については、宇野(1999). 参照。

参考文献

- Boudrillard, Jean (1976). *L' echange symbolique et la mort*, Paris: Edition Gallimard. (邦訳：1982. 『象徴交換と死』今村仁司、塚原史訳、筑摩書房)
- Butler, Judith (1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, NY: Routledge. (邦訳：1999. 『ジェンダー・トラブブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社)
- Grosz, Elizabeth (1994). “*Volatile Bodies*” Indianapolis: Indiana University Press.
- Dreyfus, Hubert L. and Paul Rabinow (1983). *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, Chicago: The University of Chicago Press. (邦訳：1996. 『ミシェル・フーコー—構造主義と解釈学を超えて』山形頼洋・鷺田清一ほか訳、筑摩書房)
- Deleuze, Gilles (1981). *Spinoza—Philosophie pratique*, Paris: Les editions de Minuit. (邦訳：1994. 『スピノザ—実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社)
- Deleuze, Gilles (1990). *Pourparlers*, Paris: Minuit. (邦訳：1992. 『記号と事件—1972 - 1990 の対話』宮林寛訳、河出書房新社)
- Deleuze, Gilles (1994). “Desir et plaisir,” *Magazin litteraire* No.325.
- Gandal, Keith (1988). “Michel Foucault: Intellectual Works and Politics,” *Telos* 67
- Gros, Frederic (1996). *Michel Foucault*, Paris: Presses Universitaires de France. (邦訳：1998. 『ミシェル・フーコー』露崎俊和訳、文庫クセジュ)
- Foucault, Michel (1984). *Histoire de la sexualite II* , Paris: Gallimard. (HS II と表記) (邦訳：1986. 『性の歴史II 快楽の活用』田村俣訳、新潮社)
- Foucault, Michel (1994). *Dits et ecrits 1954-1988 I ~IV* , Paris: Gallimard. (DE I ~IV と表記) (邦訳：1998 - 2002. 『ミシェル・フーコー思考集成(1) ~ (10)』小林康夫他訳、筑摩書房)
- Foucault, Michel (2000). *Les anormaux*, Paris: Gallimard.
- Haraway, Donna (1986). “A Manifesto for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s”, *Socialist Review* No.80 (邦訳：1991. 「サイボーグ宣言」巽孝之編『サイボーグ・フェミニズム』トレヴィル、所収)
- Honey, Sandra, Andrian Gale and James Gowan, (1986). *Architectural Monographs II, Mies van der Rohe, European Works*, London and NY: St. Martin's Press.

- Lyotard, Jean-Francois (1979). *La condition postmoderne*, Paris: Les edition de Minuit. (邦訳: 1989. 『ポストモダンの条件』小林康夫訳、水声社)
- Lyotard, Jean-Francois (1986). *Le postmoderne explique aux enfants*, Paris: Edition Galilee. (邦訳: 1998. 『こともたちに語るポストモダン』管啓次郎訳、ちくま学芸文庫)
- 市野川容孝 (2001). 『身体/生命』岩波書店.
- 宇野邦一 (1999). 「褻という応答」『現代思想臨時増刊ハイデガールの思想』.
- 酒井隆史 (2000). 『自由論—現在性の系譜学』青土社.
- 桜井哲夫 (1996). 『フーコー—知と権力』講談社.
- 桜井哲夫 (2000). 『フーコー—知の道具箱』講談社現代メチエ.
- 重田園江 (1997). 「ミシェル・フーコーの統治性研究」思想 870 号
- 杉田敦 (1986). 「ミシェル・フーコーと政治理論」『思想』782 号.
- 関良徳 (2001). 『フーコーの権力論と自由論—その政治哲学的構成』勁草書房.
- スマート、バリー (1991). 『ミシェル・フーコー入門』山本学訳、新曜社.
- ダムタイプ・企画 (2000). 『メモランダム 古橋悌二』リトルモア.
- 中山元 (1996). 『フーコー入門』ちくま新書.
- 西谷修 (1995). 『夜の鼓動にふれる—戦争論講義』東京大学出版会.
- ハイデッガー、マルティン (1997). 『ニーチェⅡ』細谷貞雄監訳、平凡社ライブラリー.
- バーナウアー、ジェームズ / デビッド・ラズミュッセン (1990). 『最後のフーコー』山本学ほか訳、三交社.
- フォスター、ハル編 (1987). 『反美学—ポストモダンの諸相』室井尚・吉岡洋訳、勁草書房.
- 藤原保信 (1991). 『20 世紀の政治理論』岩波書店.
- 松田博公 (1999). 「フーコーに出逢う旅—虹の国のクィア・ピープル」『QUEER JAPAN』vol.1. 所収.
- 村上陽一郎 (1999). 『安全学』青土社.
- 八束はじめ (1998). 「ミス・ファン・デル・ローエ」『武蔵野芸術』No.103.
- 柳内隆 (2000). 『フーコーの思想』第 4 章「統治性研究」ナカニシヤ出版.
- 山本哲士・桑田禮彰・福井憲彦編 (1984). 『ミシェル・フーコー—1926-1986 権力・知・歴史』新評論.
- 山本哲士 (1986). 「《良き調教》としての教育権力」『現代思想』1984 年 10 号、特集「フーコーは語る」
- 山本哲士 (1992). 『フーコー権力論入門』日本エディタースクール出版部.
- 山本哲士 (1996). 『フーコーの〈方法〉を読む』日本エディタースクール出版部.
- レマート、チャールズ・C / ガース・ギラン (1991). 『ミシェル・フーコー—社会理論と侵犯の試み』滝本往人ほか訳、日本エディタースクール出版部.
- 渡辺守章 (1993). 『言説の軌跡—日本におけるミシェル・フーコー』『ミシェル・フーコーの世紀』蓮実重彦・渡辺守章編、筑摩書房、所収.

Contemporary Society and the study of Michel Foucault

<Summary>

Hiroshi Ishikawa

This thesis deals with the study of contemporary society and Michel Foucault.

Based on the model of Moriaki Watanabe, I argue the direction of the study of Foucault by the “three dynamic lines”. I also argue the reflection of Foucault through the deliberation on the understandings of several scholars in Japan, such as Tetsushi Yamamoto, Yasunobu Fujiwara, and Atsushi Sugita, in order to think about the new direction of the study of him.